

IWAKI FC ACADEMY SYSTEM



イノベーティブな
いわきFCアカデミー
人材育成システム





第 1 章 いわきFCが独自の人材育成に注力している理由 3

第 2 章 いわきFCが文武不岐と人格陶冶に重きを置く理由 13

第 3 章 いわきFCが見据える育成の個別化とスポーツ万能化 23

第 4 章 いわきFCのフットボールとフットボーラーの育成メソッド etc.
以降 (近日発行予定の第2版ではアカデミーで取り組むサッカーや育成メソッドについて詳述していきます)

文・編集／手嶋真彦 デザイン／中村亮 (I'll Products) ※文中の敬称は略しました
平成31年4月7日発行
©2019いわきスポーツクラブ 禁・無断転載



第 1 章

いわきFCが独自の人材育成に
注力している理由

※ 1

株式会社ドーム



1996年5月創業の「スポーツソリューションプロバイダー」であり、いわきFCの親会社にして最大のパートナー。日本全国のプロ球団、プロクラブなどとパートナーシップ契約を結び、ユニフォームの企画・製造、マーケティング、イベント運営、ITを導入したチーム管理のシステム構築など携わる領域は幅広い。アスリート個人とも契約を交わし、栄養指導やトレーニングをサポートしているほか、サプリメントの製造・販売を手掛け、アスリート専用のジムも運営する。アメリカの大手スポーツ用品ブランド「アンダーアーマー」の日本総代理店としても知られ、創業以来「社会価値の創造」という企業理念を掲げている。代表取締役は安田秀一、専務取締役が今手義明。



※ 2

いわきFC設立

2015年12月11日

いわきFC運営会社の株式会社いわきスポーツクラブを設立。福島県社会人3部リーグ「いわきFC」の運営を引き継いだ。

2016年

11月6日 福島県社会人2部リーグ 優勝

11月20日 いわきFCフィールド オープン

2017年

4月9日 天皇杯全日本サッカー選手権
福島県代表決定戦 優勝

7月15日 いわきFCパーク グランドオープン

11月5日 福島県社会人1部リーグ 優勝

2018年

10月15日 東北社会人2部南リーグ 優勝

2019年

東北社会人1部リーグ (4/14～10/6)

被災地や被災者の復興と成長を牽引すべく。

2019年2月24日、いわきFCは福島ダービーマッチを制してみせた〔写真A〕。ただ勝利を取めただけではない。最終的なスコアは5－0と大差がついた。いったい何がこの大勝をもたらしたのか。

「サッカーの実力ではありません」

断言するのはトップチームを率いる田村雄三監督だ。

「いわきFCというクラブがなぜ立ち上がったか、どんなスタイルのサッカーを体現していかなければならないか、誰のために戦っているのか——。思いの強さ、温度差が、あのスコアという現象になってあらわれたのだと思います」

株式会社ドーム〔※1〕代表取締役の安田秀一は、いわきFC設立〔※2〕の原点となった8年前の出来事をこう振り返る。

「目に飛び込んできたのはゴースタウンでした」

2011年3月19日。東日本大震災の発生から8日後、安田は支援物資を被災地に届けなければと使命感に駆られ、ドームの社員とともに現地へ向かう。茨城を通り、海岸線へ出てしばらくすると、乗っていたミニバンから見える風景が一変した。小名浜の被災地で目の当たりにしたのは、地域一帯の壊滅的な被害であり、打撃だった。安田は内心の葛藤と直面せざるを得なかった。心の中でせめぎ合っていたのは、恐怖心と闘争本能だったのだろう。

「本能的にこう思いました。僕らは逃げる側ではなく、救う側にいなければいけない。人が誰ひとりいなくなった街を生まれて初めて見て、ここを誰かが守らなければいけないと」〔※B〕

クラブ設立のこの原点に立ち返れば、いわきFCの立ち位置がはっきりと浮かび上がる。被災地や被災者の復興を支援するクラブ。いや、被災地や被災者の復興と成長を牽引していくク



2019年2月24日に開催された「Jヴィレッジ再開記念福島ダービーマッチ」。福島ユナイテッドを相手に、いわきFCが5－0の大勝を取めた理由とは？

＜参考語録＞

「僕は東京都大田区の出身ですけど、いわきも同じ日本ですからね。いわきFCが綴っているストーリーは、いずれ世界に誇れるようになっていくと思います」(株式会社ドーム代表取締役・安田秀一)

※ 3

魂の息吹くフットボール

いわきFCが言語化したトップチームが体現していくサッカーのスタイル。フットボールの本質である「ゴールを奪う（ボールを奪い、シュートを打つ）」ために、あるいは「ゴールを守る」ために「90分間、止まらない、倒れない」を合言葉として、クイックネスやシャープネスを含めたフィジカルで相手を圧倒しながら、最後まで戦い続ける。スタジアムをエキサイトメントに満ち溢れた熱狂空間として、感動、希望、勇気といった無形の価値を提供する。

ラブに他ならない。

いわきFCのトップチームが「魂の息吹くフットボール[※ 3]」を体現していかなければならないのは、筆舌に尽くしがたい困難に見舞われたいわきの人々の前進を力強く後押ししていくためだ。「90分間、止まらない、倒れない」魂の息吹くフットボールを通して、無形の価値を提供する。感動、希望、勇気といった心の養分が、一度はゴースタウンと化した地域やその地域を含めた地元の街を「復興から成長へ」と導いていく。

街を、あるいは地域社会を構成しているのは、様々な職業の人々であり、様々な立場の人々だ。「復興から成長へ」の担い手も、職業は様々で、立場も様々だろう。そうした多種多様な担い手を、スポーツ活動を通して輩出していこうとしているのが、いわきFCというクラブであり、人材育成の中心となるのが本書でその取り組みを詳述していくアカデミー組織なのである。

いわきFCは次の理念を掲げている [図C]。

〈スポーツを通じて社会価値を創造する〉

創造しようとしている社会価値とは豊かな街づくりであり、アカデミーで継続的に育むべきなのはそうした豊かな社会を実現していく担い手たちだ。自主的に創意工夫を凝らせる様々な担い手が増え続けていけば、「復興から成長へ」の速度が加速する。

「復興から成長へ」の担い手に限らず、いわきFCのアカデミーが多様で多彩な人材を輩出していくために、まず何が必要なのだろうか。田村雄三は言う。

「安田さんのセリフを借りると、この話は『コメじゃないぞ』で始まります」

安田秀一は田村にこう言ったのだ。子供は米（コメ）を食べて大きくなるわけではない。

いわきFCの理念／ビジョン



※ 4

文武不岐(ぶんぶふき)

不岐とは「分けず」の意味。学業に励むことがスポーツに役立ち、スポーツに励むことが学業にも役立つ。そう捉えることで相乗効果を上げていけるとする考え方。一般的に使われる「文武両道」には学業は学業、スポーツはスポーツ、それぞれの道をそれぞれで極めていくといった捉え方もあるため、いわきFCはクラブの方針をより明瞭に示せる「文武不岐」を打ち出している。

いわきFCパーク

2017年7月にグランドオープンを迎えた、いわきFCの商業施設複合型クラブハウス。館内には最新鋭のマシンを取り揃えたトレーニング施設のほか、アンダーアーマーの直営店や輸入車の販売店、英会話教室などが並ぶ。3階のフードコートからは、最新の人工芝を使った「いわきFCフィールド」を一望できる。2019年には地域医療と健康課題の克服に貢献する「いわきFCクリニック・いわきFCリハビリステーション」や、アスリートのための食事を提供する「いわきFCステーション」が新たにオープンした。

「夢（ユメ）を食べて大きくなるんだ」

いわきFCが着手している文武不岐[※4]の仕組み作り、語学（英語）習得を含めた人としての幅や奥行きを広げていくための働き掛け、アカデミー全員のスポーツ万能化を目指した野心的な取り組み、さらには視野に入れている競技転向等の前例のないシステム構築は、多様で多彩な人材の継続的な輩出を見据えていればこそ。様々な夢が叶うような重層的な環境の整備を着々と進めている。

大きな夢を思い描けるのは、無限の可能性を秘めている子供たちの特権だ。叶えたい夢が、やる気の元となる。やがて向き不向きも出てくるだろう。だからこそ、進路の選択枝は複数（できれば多数）あった方がいい。より適性の高い夢を叶えられたら、よりいっそう力を発揮できるに違いない。

アカデミーの子供たちと向き合ういわきFCの指導者全員に求められるのは、選択枝や可能性を広げていく1人ひとりのしっかりとした土台作りの支援であり、手助けだ。子供たち全員が“夢”を栄養として、着実に成長していくために何ができるのか。固定観念に縛られず、常識や前例を疑いながら、子供たちと真摯に向き合い続けていかなければならない。

1000人全員が成長し、幸せになるアカデミー。

あらゆる固定観念を疑う。この習慣がまずは必要だ。いわきFCの指導者（だけでなく全関係者）たるもの、「当たり前」を疑うところから、あらゆる第一歩を踏み出さなければならない。さっそく始めよう。疑問その1。

——サッカークラブのアカデミーの目的は、突き詰めればプロサッカー選手を作り出すところにあると言う。本当にそうなのか？

続けて疑問その2。

いわきFCの5つの戦略（1～3）**1. スポーツファシリティの運営・整備**

街のシンボルとなるスポーツファシリティの運営・整備を行う。商業施設併設型クラブハウスに始まり、将来はスタジアムを建設。365日稼働させ、欧米型スタジアムビジネスを実現していく。

**2. 「魂の息吹くフットボール」で熱狂空間を創出する****3. 世界基準のチームビルディング**

日本スポーツ界にイノベーションを起こすべく、世界基準の取り組みを実施。フィジカルを鍛えるためのストレングストレーニング、フットウェア、ギア、サプリメント。アスリートの食事、栄養管理、医療、デジタルなど、多角的なアプローチを行う。また、マーケティングでは最新のITソリューションを用い、パーソナルに情報を届け、ワクワクドキドキするようなカスタマーエクスペリエンス（顧客の経験）の最大化を図っていく。

いわきFCフィールド



人工芝にはコナツツヤシやコルクなど天然素材のチップを使用し、サッカーコート1面とフットサルコート2面を整備。400人収容の屋根付きスタンドもある。総面積は1万3000㎡。

——アカデミーも結局はサバイバルなのだから、落伍者が出てくるのもやむを得ない。本当にそうなのか？

いわきFCの理念の先にある〈豊かな社会〉とは、どのような社会なのだろうか。煎じ詰めれば、その社会を構成している1人ひとりが幸せを感じられる社会ではないか。

幸せとはどのような状態か。人類の繁栄は、太古から続く集団生活を基盤としてきたようだ。集団内で居心地よく過ごしていくために大きな意味を持つのが他者からの承認だとすれば、幸せとは誰かに尊重されている、受け入れられている、肯定されている、そんな状態でもあるだろう。自らも他者を尊重し、受け入れ、肯定する。全員で助け合い、支え合う。そんな理想は非現実的な空想に過ぎないと一笑に付すか、どんなに実現困難であっても見据えるべき未来と捉えるか。いわきFCはその設立の原点を踏まえても、困難な道を選び続けるクラブに違いない。

暫定的なこの幸せの定義を前提として、それでは疑問その3。——仮に1人のプロサッカー選手を作り出すために、999人の落伍者を生み出してもやむを得ないと割り切るアカデミーのシステムが存在するなら、そのクラブは社会を豊かにしていると言えるのか。999人の落伍者がそれまでサッカーオンリーの人生で、学業をおろそかにしてきたとするならば？ そのアカデミーはむしろ社会を貧しくしていく方向へ、目には見えない片棒を担いでいるのではないか。

いささか挑発的にこうした疑問を呈する理由は、もうお分かりだろう。いわきFCが、既存のモデルを基準にすれば異端にしか映らないであろう取り組みを進めているからだ。既存のモデルへの違和感や疑問に端を発し、新たな世界観を地域や社会に提案していく挑戦とも言える。

そもそも既存のモデルは、なぜ成り立っているのだろうか。

いわきFCの5つの戦略（4～5）

4. 未来を担う人材の育成

THE SMART ATHLETE



THE ATHLETIC WOMAN



5. 地域との一体化

地域と手を取り合い、官民一体となって「オールいわき」としてスポーツを核とした街づくりを進め、地域経済の復興そして発展に貢献していく。



※ 5

Key Word

ダイバーシティ

「多様性」を意味し、元々は「性別や国籍を問わず企業や公共機関が多様な人材を採用、登用すること」(現代カタカナ語辞典より)を指した。そこから転じて、近年は「多様な人々がいる」という状態を指すようになっている。例えば日本国憲法から引用すると、第14条に記された「人種、信条、性別、社会的身分又は門地」の様々な人がある状態。あるいは様々な価値観を持つ人々、様々な視点を持つ人々が、社会やコミュニティにいる状態だ。

※ 6

Key Word

インクルージョン

「包含、包摂」を意味し、噛み砕けば「全てが含まれている」。様々な視点を持つ人々、様々な価値観を持つ人々がそれぞれを認め合い、共生している状態をインクルージョンと言う。社会やコミュニティのインクルージョンは、最大多数の最大幸福の前提だという考え方もできる。

※ 7

コーチ

語源は15世紀に馬車の製造を始めたハンガリーの町「コチ」。ここで造られた馬車が乗り心地に優れていたため、コチ＝馬車を意味するように。その後、馬車が物や人を目的地へ運ぶことから、「コーチ」という単語は「選手を目標へと導く」スポーツ指導者を指す言葉へと転じていった(出典:ジャパンコーチズアソシエーション)。

※ジャパンコーチズアソシエーションについては9頁を参照。

アカデミーの門を叩く子供たちは、意志の強弱こそあれプロサッカー選手になりたいという夢は持っているだろう。その夢を叶えるのが難しくなってくれば、サッカーを続けられる進学を希望するかもしれない。保護者の期待もおそらく背負っている。いずれにしてもこの場合は、指導者への強いニーズがサッカーを上達させるところにあるので、結果として1人の成功者と999人の落伍者が生まれてしまうシステムが温存されてきたのかもしれない。

いわきFCが目指しているのは、999人の落伍者を生み出すようなアカデミーなどではない。1000人全員が大きく成長し、それぞれがそれぞれの目標を達成できるアカデミーであり、いずれプロサッカー選手が誕生するとしても、そうした取り組みの結果としてで構わないというスタンスなのだ。さらに踏み込めば、アカデミーの出身者全員が幸せになっていくための土台作りを手助けできる、そんな人材育成を見据えている。

だとすると、必要なのは、ダイバーシティ [※5] とインクルージョン [※6] だという話にもなってくる。ダイバーシティとは多様性であり、インクルージョンとは多様性を認め合える環境を指す。人間は十人十色。全員違う。つまりダイバーシティそのものであり、アカデミーがそうした多様性を尊重し合える環境にないならば、1000人全員の幸せを叶えるのはおそらく難しい。

1000人全員を幸せにできるアカデミーには、何が必要なのだろうか。1人ひとりが未来の可能性や選択肢を広げていくための土台をしっかりと作っておける環境だろう。いわきFCが学業を重視しているのも、全員の「スポーツ万能化」を目指しているのも、そもそもの土台をできるだけ大きくしておくためだ。アカデミーの指導者は、そうした子供たちの土台作りを支援し、手助けする。常に求められるのは、本来の意味でのコーチ [※

<参考語録>

「子供って実は放っておけば勝手に成長していきます。指導者は導く人ですよ。結果を出している監督やコーチに話を聞いても、教えたわけじゃない、判断を含めて選手が自主的に成長できる環境を整えたといかないません」(株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役・大倉智)

D

ジャパンコーチズ アソシエーション



日本におけるスポーツの健全かつ継続的な発展と、よりよい社会づくりへの寄与を目的として設立された一般社団法人。スポーツ指導者が連携し、切磋琢磨し、成長するための情報や機会を提供する。会員資格は「プロ、アマ、国籍を問わず、日本のスポーツ指導に関与する者」で、設立趣意に賛同する会員を随時募集。上のQRコードからも会員登録できる。

設立趣意は以下の通り（公式HPから抜粋）。「わが国が直面していく課題の解決には、計り知れない困難を有する。資源に限りあるわが国においては、優秀な人材の育成が国家の繁栄に結実する、という厳然たる事実がある。

多様な価値観が混在する現在及び将来において、スポーツが国家を支えるべき人材を輩出することもまた事実である。わが国が将来にわたり大いなる繁栄を勝ち得るには、スポーツが自律的且つ継続的な発展を続けることが不可欠であり、そのためには経済的な後援が肝要となる。

こうした時代背景を鑑みれば、スポーツがわが国において果たすべき役割は甚大であり、大いなる可能性が潜在していることを強く理解せねばならない。我々は自らの行動により、その役割を最大化し、社会的な価値へと昇華させる。ジャパンコーチズアソシエーションの設立目的は、そのひと言に尽きる」

※ 8

Key Word

スポーツ・インテグリティ

アカデミーの選手たちの人間的な成熟の度合いに応じて、スポーツ・インテグリティという価値を知らせていく必要もある。インテグリティは「高潔さ」「健全さ」などと訳される。日本スポーツ振興センターはスポーツにおけるインテグリティを「スポーツが様々な脅威により欠けるところなく、価値ある高潔な状態」と定義する。様々な脅威には「暴力、ドーピング、八百長、ハラスメント、差別、スポーツ団体のガバナンスの欠如など」が想定されている。

7] [※D] としての姿勢なのだ。

1人ひとりの個性をより尊重する分、例えば人に優しくできるといった「変わらない大切なもの」を十分に育てていく必要もある [※8]。なぜかと言えば、社会やコミュニティの中で他者から承認されるには、同じ価値観の共有という同質性が大前提となるからだ。同質性の保証があるからこそ、多様性を尊重できる。

いわきFCの指導者たちはすでに多様性を踏まえた、独自の発想を共有しつつある。例えば、アメリカの大学からスカラーシップ（奨学金）を得て、アカデミー卒業後もサッカーを続ける。スポーツ推薦ではなく勉強で日本の名門大学に進学する。理想を言えば、世界最高峰のトップクラブからプロ契約を誘われ、世界最高峰の大学にも合格しているようなスーパーマルチな人材の輩出だろう。

いや、そうした発想ですら既存モデルの延長線上にある。もっと多種多様でいいのではないかという声も聞こえてくる [※E]。例えばサッカーと勉強をどちらも最後まで頑張り抜いた「真面目で頼りにできる人」として、あるいは集団スポーツならではの複雑な人間関係の中でチームメイト全員の支えとなった「ひたすら優しい人」として、地域社会から引っ張りだことなるアカデミー出身者が出てきても、たしかに良いのかもしれない。

社会課題の解決を含めた地域貢献へ。

サステナビリティという言葉がある。辞書を引けば「持続可能性」（広辞苑第六版）と記されている。この持続可能性をより意識的に追求しているサッカークラブが、いわきFCなのだという見方もできる。「復興から成長へ」という長年に渡るであろう取り組みを安定した軌道に乗せ、地域経済を滑らかに循環させていくためには、アカデミーのあり方も無関係ではな

<参考語録>

「ひたすら優しい人とか。気持ちがある人とか。それでも全然いいじゃないですか。あらゆる可能性に尊敬を与えられるような、そんなクラブでありたいですね」（株式会社ドーム代表取締役・安田秀一）

「どんな子だっていいですよ。その子たちが大人になった時、子供たちに同じような考えを持ってくれたらいいなと思います」（株式会社ドーム専務取締役・今手義明）

※9

Key Word

暦年齢

誕生からの日数と同じ。成長には個人差があるため、生物学年齢とは大小のズレが生じる。

※10

Key Word

生物学年齢

成長の度合いで推定する年齢。成長が遅ければ暦年齢は13歳で生物学年齢は11歳、成長が早ければ暦年齢は13歳で生物学年齢は15歳といったズレがある。

※11

いわきSCの取り組み

いわきスポーツ アスレチックアカデミー (ISAA)



子供たちが遊びながら体力をつけ、運動スキルを楽しく学べるプログラムを提供するスポーツクラス。入会案内は上のQRコードから。

創設：2017年 8 月

活動：週 1 日（水曜午後）

在籍者数

5 歳40名／ 6 歳47名

7 歳56名／ 8 歳40名／ 9 歳44名

10歳35名／ 11歳33名／ 12歳41名

(2019年 4 月 7 日現在)

※12

アカデミー全般を無償で展開

月謝はかからない。ウェア代など費用の一部は本人（保護者）が負担。

※13

株式会社いわきスポーツクラブ

いわきFCの運営会社で、略称「いわきSC」。代表取締役は大倉智。

い。

いわきFCのアカデミーが、多くの落伍者を出し続ける従来型のピラミッド構造〔図 F〕を打ち壊し、新たな育成モデル〔図 G〕を打ち出しているのは、全員成長できる新たな仕組みの方が地域からの共感を集めやすく、持続可能性が高くなると判断しているからに他ならない。暦年齢〔※9〕によるカテゴリー分けを順次撤廃し、生物学年齢〔※10〕などを基準とした新機軸のトレーニングを進めていこうとしているのは、その移行を後押しする科学的な根拠を信頼したからだ。

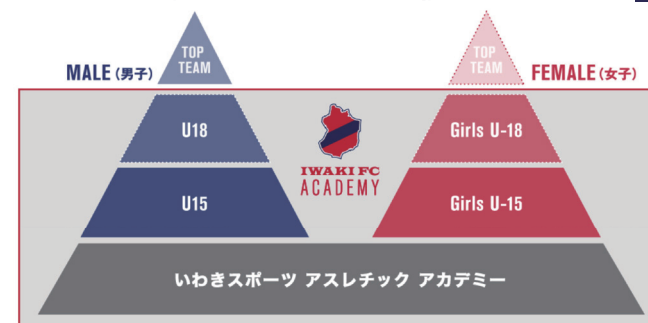
アカデミー本体の下に「サッカースクール」ではなく学校体育の代替とも目せる「運動スポーツ体験クラス〔※11〕」を設けていることにも明確な狙いがある。こうした独自の取り組みに踏み切った意図や背景は、第2章以降で詳しく掘り下げる。

いわきFCがアカデミー全般を無償で展開〔※12〕している下地には、既存の有料モデルへの異議がある。見方によっては「お宅のお子さんをプロサッカー選手に」という響きのいい餌をぶら下げて、脱落していく999人の月謝によって儲けを出しているビジネスだ。その収益を育成部門の充実に投資するならまだしも、

トップチームの強化に回しているのだとすれば、歪んだビジネスではないかという話にもなってくる。いわきFCにとってアカデミーの活動は未来への投資であり、地域貢献活動そのものなのだ〔※H〕。いわきFCを運営する株式会社いわきスポーツクラブ〔※13〕の大倉智代表取締役は、アカデミーを通した

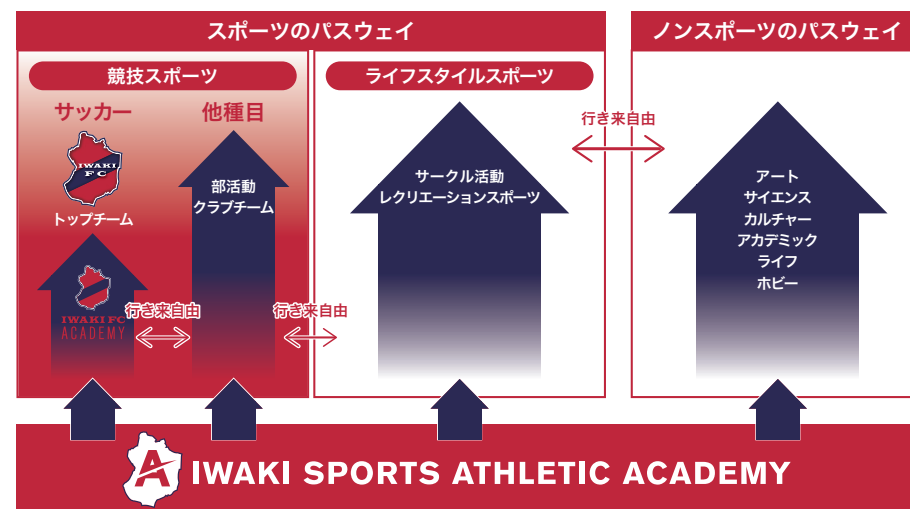
アカデミー組織従来型のピラミッド構造

F



いわきスポーツクラブマルチキャリアパスウェイモデル

G



※14

時代背景

社会構造の変化

日本の子供たちの体力・運動能力に関する問題が深刻化している背景に、社会構造の変化がある。日常生活のいわゆるオートメーション化が進み、身体を動かさなくても生きていける時代となった。昔の子供たちが持っていた「時間」「仲間」「空間」という3つの「間」(26頁の本文を参照)を現代の子供たちは失いがちで、身体を動かす習慣を減らしている。さらには携帯ゲーム機をはじめとする運動やスポーツ以外の遊び(娯楽)の普及により、体力・運動能力の低下を招くオプションを自ら選択しているという側面もある。

地域貢献の大きな意義を次のように捉えている。

「アカデミー本体の子供たちも、その下の運動スポーツ体験クラスの子供たちも、まずは元気に汗をかいて健康になる。同時に学力も上がっていく。スポーツでも勉強でも何でもいから達成感を得てくれる。子供たちの生き生きとした様子や歓声が、親御さんや地域の皆さんを元気にしてくれる。笑顔に溢れたそんな場所を提供していきたいです」

アカデミーを通じた地域貢献には、社会課題の解決も含まれる。4歳から12歳を対象とする運動スポーツ体験クラスは、日本全国の子供に広がる運動機能障害、体力・運動能力の低下や偏りといった、それこそ幸せの土台を揺るがしかねない傾向[※14]の改善を図っていこうとする取り組みでもある。東日本大震災後の運動不足の影響もあるのだろう。いわきの子供は相対的な肥満出現率が高いというデータもある。スポーツを通じた社会課題の解決は、いわきFCが掲げる〈スポーツを通じて社会価値を創造する〉という理念に沿ったクラブそのものの土台作りの一環でもあるだろう。

そもそも2019年が創立4年目のいわきFC自体、まだ成長の途上にある。新たな世界観、新たな価値観を着実に確立し、その成果を発信していく上で幾多の壁を乗り越えていかなければならない[図1][※1]。

乗り出しているのは壮大な挑戦だ。遠くない将来には、トップチームの試合観戦や応援などでしっかりした対価を得るなど、当初から構想しているマネタイズを実現したい。そのためには、いわきの人々のいわきという地域へのロイヤリティ(愛着、忠誠心)の確固とした対象となっていく

<参考語録>

「大事なのは未来への投資。少子高齢化の時代を迎えて、政治は高齢者向きになっている。子供には選挙権がないので、すごく不公平だと思います。誰かが子供たちの権利をしっかり保つような社会のために戦わないと。国の政策が高齢者向け主体になっているのだとしたら、民間で将来への投資をしていかなければと思います」(株式会社ドーム代表取締役・安田秀一)

「震災が起きてから、子供たちに夢とか明るい未来を見せてあげたいとずっと思っていました。子供たちに何かできないかという思いがベースにあって、アカデミーをやろうという話になったと思います」(株式会社ドーム専務取締役・今手義明)

いわきFCがビジョンを達成するために
大切にする姿勢と信念

※15

無知の知

古代ギリシャの哲学者ソクラテスの言葉。「自分の無知を自覚することが人間に可能な最高の知であるという（中略）ソクラテスの根本的考え」（広辞苑第六版）を示したものだ。

必要がある。

サッカークラブが原動力や牽引車となり、地域経済を回していく挑戦にはさらに続きがある。スポーツによる地方創生の普遍的な成功モデルを作り、他の地方都市を巻き込んでいく。様々な側面で制度疲労が顕著になっている日本という国自体を、地方から立て直していこうという世直しの試みなのだ。

「大人が挑戦しないで、子供たちに挑戦しろと言えますか？」
[※K]

安田秀一のこの言葉だけで、親会社をはじめとするクラブの覚悟が伝わるだろう。いわきFCとは、その挑戦や存在自体にメッセージが込められているクラブなのだ。文字通りの地域貢献を果たしていくアカデミーも重要な発信源であり、その活動を通して地域にさらに溶け込み、共感の輪を大きく広げていかなければならない。アカデミーの指導者は第2章以降で紹介していく様々な取り組みの直接的な担い手なのであり、子供たちの良き模範となるためにも自分自身を磨き続けたい。「無知の知」[※15]を自覚しながら、貪欲に学び続ける。変化を恐れず、子供たちの育成環境を日々改善し続けていくべきだ。

いわきFCの親会社にして最大のパートナーである株式会社ドームの新たな物流センターとして、2015年末に竣工したのがこの「ドームいわきベース（DIB）」。

雇用の創出等を通じて震災からの復興の一助にという願いは、DIBの敷地内を本拠とするサッカークラブ（いわきFC）の創設にも繋がった

<参考語録>

「スポーツの理屈で子供を育てるというのがどういうことか、ちゃんと明確にして、発信していきたい。それが社会の変革にもつながっていくでしょうし」（株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役・大倉智）

「束縛や制約が張り巡らされた社会の中では、どれだけ正しい取り組みでもなかなか実行に移せない。それでもいわきFCは思い切ってやろう。これが本当に正しいあり方なんだと結果を出して発信し続けよう。正しいことをやろうと思っているだけです」（いわきFC監督・田村雄三）

<参考語録>

「世の中に決められたことをやる、決められていると思われるようなことをやるのが人生じゃない。それを1人でも多くの子供たちが分かって、湧き出る自分のエネルギーで前に進んでいける人生を歩んでもらえたら、日本も良くなるんじゃないかと思うんですけどね」（株式会社ドーム代表取締役・安田秀一）





第 2 章

いわきFCが文武不岐と
人格陶冶に重きを置く理由

※ 1

全体なのか、部分なのかは、シンプルな命題から判断できる。例えば「サッカーは社会の一部」だが「社会はサッカーの一部」ではない。「サッカー選手は全員が人」だが「人は全員サッカー選手」ではない。

※ 2

人格陶冶

人格とは「独立した個人としての人間性。人の性格・品格」（明鏡国語辞典第二版）、「①その人の物の考え方や行動の上に反映する、人間としてのありかた。[好ましいか、好ましくないかという観点から見たもの] ②能力と自覚を備えた一人前の人間として認められること。また、その存在」（新明解国語辞典第七版）
陶冶とは「人の性質や才能をきたえて育て上げること」（明鏡国語辞典第二版）、「いろいろな試練を経させて、役に立つ一人前の人間に育て上げること」（新明解国語辞典第七版）

※ 3

ずる賢い

「自分だけが得をしようと巧みに悪知恵を働かせるさま。悪賢い」（明鏡国語辞典第二版）、「悪知恵にたけていて、何かにつけてずるく立ち回る様子だ」（新明解国語辞典第七版）

サッカー以外でしか学べないことがある。

全体なのか、部分なのか。

「サッカーも社会の一部にすぎません」

いわきFCのトップチームを率いる田村雄三監督は、この発言通り、サッカーを社会という全体の一部だと捉えている [※ 1]。社会の一部分なのだから、サッカー選手もプロアマ問わず当然社会人だ。アカデミーの中高生たちも、いずれは社会人となる。さらに突き詰めれば、結局全員“人”なのだ。いわきFCはこのややもすると忘れてしまいがちな真理を前提として、人を成長させる文武不岐（6頁を参照）と人格陶冶 [※ 2] に重きを置く。

繰り返そう。プロサッカー選手も人である。プロを目指している予備軍も、アカデミーの子供たちも人なのだ。

ここで二者択一。賢い人と、賢くない人。社会の中で活躍できる可能性が高いのは、どちらだろうか。答えは言うまでもない。では、賢い人と、ずる賢い人 [※ 3] では？

いわきFCが文武不岐の実現に力を注いでいるのは、アカデミー [※ 4] の子供たちに賢くなってほしいからだ。田村はその意図をこう説明する。

「賢いプロサッカー選手の方が生き残っていけるからです。いろいろ吸収が早いでしょうし、その世界で長く食べていける。それでもプロ選手としての寿命はずっとは続きません。ですから、あらかじめ学業をしておく、英語もやっておく [※ A]。そもそもプロを目指しても、全員なれるわけではありません。しっかり勉強しておけば、違った道が開けてくる。そういう話です」

いわきFCが人間性に磨きをかける人格陶冶を重視しているのは、アカデミーの子供たちにずる賢い人になってほしくはな

<展望&課題>



ユースでも英会話学習を

いわきFCパーク（商業施設併設型クラブハウス）内には英会話教室がテナントとして入居しており、アカデミーに在籍する中学生の活動にはすでに英会話学習がプログラムの一環として組み込まれている（授業料の一部は保護者が負担）。この取り組みを近々、高校生の活動にも含めていく計画が持ち上がっている。これまではトレーニングに充てていた毎週木曜日を英会話学習の日に改め、具体的にはTOEFL(会話力を含めた英語力を計測できる試験サービス)でのスコアアップを目指すことになりそう。学習効果が上がってくれば、例えばアメリカの大学からスカラーシップ（奨学金）を得て、当地の運動部でサッカーを続けられるといった選択肢も視野に入ってくる。日本国内での大学受験対策にもなるだろう。

議論の余地が残されているのは時間の割り振りだ。これまではトレーニングだけに使っていた1時間30分を丸々英会話学習へと移行するのか、1時間は英会話で残りの30分は身体を動かす自主練などとするか。週間や月間のトレーニング計画なども考慮に入れながら、クラブ内での協議を進めているところだ。

※ 4

いわきFCのアカデミー



創設:2017年4月

2017年4月～

男子U15第1期生

〈現U15(中3)/17名在籍〉

女子U15第1期生

〈現高2/1名在籍→卒業〉

〈現高1/5名在籍→卒業〉

〈現U15(中3)/10名在籍〉

〈現U13(中1)/2名在籍〉

2018年4月～

男子U18第1期生

〈現U17(高2)/12名在籍〉

男子U15第2期生

〈現U14(中2)/15名在籍〉

女子U15第2期生

〈現U14(中2)/6名在籍〉

2019年4月～

男子U18第2期生

〈現U16(高1)/10名在籍〉

男子U15第3期生

〈現U13(中1)/15名在籍〉

女子U15第3期生

〈現U13(中1)/6名在籍〉

計93名在籍中(2019年4月7日現在)

いからだ。田村の話はこう続く。

「サッカー選手の価値は、サッカーの技量だけでは決まりません。総合的に必要とされる選手はチームに残っていくでしょう。人間性を含めたトータルの価値が物を言うからです」

そもそも賢い人とは、どのような人なのか。

いわきFCは「ザ・スマートアスリート」[※B][※C]という耳慣れない言葉を用いて、アカデミーでの育成の目標を表現する。手塩にかけていきたいのはスマートという形容詞が意味する「賢明な、利口な」アスリートだが、その言動が賢明かどうかは置かれたその時々状況によっても変わってくるだろう。

視点を少し変えてみる。人はどのように賢くなっていくのだろうか。

賢さの土台には、まず知識が必要だ。森羅万象をどう認識し、どう理解するか。その脳内のストックが知識であり、蓄えておく知識は幅広く豊富な方がいい。人間の生理や心理、世界や社会の仕組み、宇宙や地球の成り立ちなど、ミクロからマクロまで知っておいた方がよい事柄はいくらでもある。

ただし、知識をたくさん備えているだけで賢いと言えるかどうかは、微妙なところだ。いわきFCが育成しようと努めているのは、単に物事をよく知っているだけのアスリートではなく、ピッチの上でも一般の生活でも課題や問題を解決し続けられるスマートアスリートであるからだ。

臨機応変に課題を解決できる能力を“知恵”と言う。知恵をふんだんに持ち合わせていれば“知能”となる。知能の高い人は、ばらばらだった知識に芯を通し体系化した教養を基礎として、知恵を活かしながら、課題の合理的な解決を試みる。

このように自分の頭で考えて、課題を次々に解決できる人が賢い人だ。多面的な視点で思考できる客観性と、思考を深掘りできる論理性があれば、課題解決力はさらに高くなる。

<展望&課題>

B

ザ・アスレチックウーマン

いわきFCはアカデミーの男子を「ザ・スマートアスリート」に、女子を「ザ・アスレチックウーマン」に育てていくという育成のビジョンを掲げている。アスレチックウーマンについては「優れたパフォーマンスと美しさ、そして強い意志を兼ね備えた世界基準の女子アスリートを育成。サッカーというスポーツを通じ、女性としての成長も目指します」(クラブ公式HPより)と明記している。文武不岐と人格陶冶に重きを置くのは女子も同様だ。

<参考語録>

C



「スポーツをずっと続けてほしいし、健康であり続けてほしい。さらにはアメリカに実在するような、強い意志を持った美しい女性に成長してほしい。そのような願いを込めて、いわきFCはアカデミーの女子が活動する際の服装(写真)を決めています」(株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役・大倉智)

「壁にぶちあたった時、乗り越えていく術を、自分の頭で考えられるかです」

以前に J リーグのクラブのアカデミーでコーチを務めた経験を持つ田村は、話をこう続ける。

「考える力があれば、たとえ壁に阻まれたとしても、乗り越えていけるものです」[※D]

もちろん、知恵も万能とは限らない。応用範囲が限られるものもある。

「サッカーの戦術をいくら熟知していようと、それだけではスマートアスリートは生まれてきません。優先順位が高いのは学業の方なんです」

いわきFCのコーチングスタッフに聞いた、次のような証言もある。

「学校の勉強ができないと、たいてい理解力も低いです。コーチが何の話をしているか理解できないので、成長していきません。自分で考える力もないので、自身の改善に繋がる選択もできません。どちらを選べば良くなるか、その判断ができないからです」

こうした悪循環から抜け出すためにも、学業はおろそかにできないのだという話になってくる。しかし、ただ知識を詰め込むだけで知恵にはできず、問題解決に活用できないままなら、宝の持ち腐れになるだろう。どうすれば知識と知恵の橋渡しが可能になってくるのだろうか。

鍵を握っているのは、当の本人が問題の解決を迫られるような実際の体験だ。本当に困ったり、戸惑ったり、そうした場面にどれだけ遭遇し、場数を踏んでおけるか。自身の身に降りかかってきた問題をどうにか解決しようと、知識を総動員する思考によって、少しずつでも知恵は発達していくはずだ。自身の知恵だけでは解決できない問題に直面すれば、仲間を頼る。人

<展望&課題>

D

レジリエンス

考える力は別の言葉にも置き換えられるはずだが、そのひとつに「レジリエンス」がある。「回復力、弾力、復元力」。2011年3月の東日本大震災後に使われるようになった。困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」（現代カタカナ語辞典）を意味する概念で、レジリエンスには「思考の柔軟性」も必要だと指摘する研究がある。考える力が“上位概念”だとすれば、いわきFCの指導者にはレジリエンスのような“下位概念”を見出し、指導者間で共有する努力も求められる。

カズコーチ語録①

ジャパンコーチズアソシエーション（9頁参照）の招待で2019年2月に来日講演したアメリカの名コーチにして優れた教育者、ジョー・カサメント（通称カズコーチ）の珠玉の言葉を紹介していく。

「愛を持って選手に接することが大事です。愛がなければ、そのための努力をしなくてははいけません。選手に話しかける時、注意する時、愛を持って話していると伝えなくてはいけない。愛のない言葉に選手は耳を傾けません。愛というのは本当に力強いもので、愛がカルチャーを作るのです」

Joe Casamento ジョー・カサメント（通称カズコーチ）

セントジョーンズ・カレッジハイスクール
アメリカンフットボール部ヘッドコーチ&攻撃コーディネーター

1948年生まれ。1972年にニューヨークで高校アメリカンフットボール部のコーチを始め、その後48年間のキャリアで率いたチームを12回のカンファレンス優勝に導く。通算勝率は8割を超え、負け越したシーズンはわずかに一度だけ。2015年からはワシントン州のセントジョーンズ・カレッジハイスクールの起業家センターで、イノベーション&リーダーシップの講義も担当している。

の知恵を拝借し、問題や課題の解決を通して自分の知恵とする。

いわきFCの指導者が心掛けなければならないのは、まず子供たちに自分で経験させる、つまり考えさせる時間と場所の提供だ〔※E〕。ピッチ上でのトレーニングや試合中、運動の前後の時間、移動中など、すなわちアカデミーの活動の全てをいかに良い経験の場としていくか。田村はこう言っていた。

「最初はヒントを与えながら、子供たちが自分で考えられる力をつけていくように導くのが、僕ら指導者の役割です」

導く側が意識すべき課題は、無理に押し付けず、自主性をいかに引き出すか。以下は、コーチングの経験が豊富な、いわきFCのスタッフから聞いた話だ。

「コーチにやられる、こなすだけの練習ではなく、自ら率先して課題に取り組み、手応えを掴めるようになると、そうした満足感の積み重ねがやがて自信にも変わっていきます。僕が練習中に注意しているのは、選手の手応えや満足感です。よし、今日もやったというような気持ちで、その日の練習を締めくくってほしい。それはどのクラブで、誰を指導していても変わりません」

子供たちが好きなサッカーはともかく、学業でいかに自主性を引き出せるかが、文武不岐を実現していくための大きな分かれ目となる。指導者自身もアカデミーでの活動を通して、頭を働かせ、知恵を絞っていかなければならない。

サッカーで学べるサッカー以外のこともある。

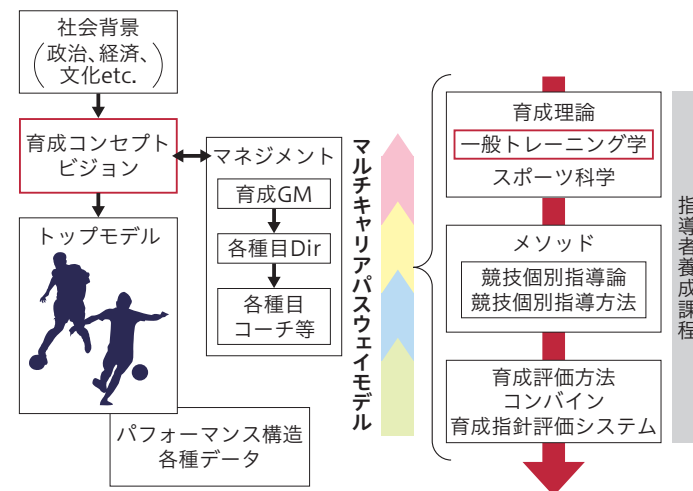
右に掲げているのは、いわきFCが構築しようと目論む「育成システム」を一覧化した概念図〔図F〕である。図の左側に位置する「育成のコンセプト ビジョン」が、いわきFCの場合は「スマートアスリートの育成」であり、だからこそ学業にも力を入れるという相関関係が、ここまでの話から浮かび上

<展望&課題>

寮、栄養、睡眠

「いわきFCは毎回のトレーニング後の食事を、専任の栄養士がきちんとバランスを考えたメニューで提供しています。経験という意味では、アカデミーの子供たちの食事中に高校生が中学生に向けて栄養の摂り方を解説するとか、高校生に向けてはトップチームの選手に講義をさせるとか、そうした試みも可能でしょう。睡眠の取り方にも良し悪しがあります。そう考えると、いわきFCもいずれはアカデミーの子供たちのための寮を作りたい。そんな希望も持っています」(いわきFC監督・田村雄三)

いわきSCが構築を目指している「育成システム」



上図はいわきスポーツクラブが構築を目指している育成システムを可視化したもの。図中の「マルチキャリアパスウェイモデル」（10頁の図Gを参照）とは、サッカー界における移籍やサッカーからの競技転向を可能とし、文武不岐を含めたデュアルキャリア（21頁を参照）を平行して築ける育成モデルだ

※ 5

いわきFCの取り組み

学業との両立① 学校との連携

いわきFCのアカデミー担当コーチは、在籍する子供たちがそれぞれ通っている学校に掛け合い、高校各校とは連携関係をすでに築いている。学校での言動に問題や変化があれば、担任の教師や学年主任の先生からクラブに連絡が入り、逆にクラブでの活動中の様子がおかしいようなら、学校で何か異変がなかったかアカデミー担当コーチから問い合わせる。2018年度から本格的に始動したこの取り組みで、すでに特定のアカデミー生の素行が改善するなど徐々に成果を上げつつある。

学業の進捗具合についても高校側の協力を得て、アカデミー生1人ひとりの成績を把握できているだけでなく、次回の定期テストでクリアしなければならない教科別基準点の設定を学校側に引き受けてもらっている。

その一方で中学校は、アカデミーに在籍中の男女が通っている連携対象校が分散しており、高校と比べると学校の絶対数が多い。さらに、比較的フレキシブルに面談できる高校の教師とは異なり、中学校は先方から指定される面談の開始時刻が放課後の一定時刻に偏りがちといった事情もあり、各校との連携強化が今後の課題として残されている。

連携対象学校数

高校	6校
中学校 男子	28校
中学校 女子	14校
(うち男子と重複が10校)	

がってきただろう。

いわきFCは文武不岐を実現していくための取り組みを、すでに複数進めている [※ 5～8] [※ G]。例えば、アカデミー在籍者全員の学業成績を把握するために、各自が通っている学校と連携を取っている [※ H]。試験の結果が振るわなければ、サッカーを強制的に取り上げてでも、勉強のための時間を確保する。なぜ、サッカークラブがそこまで深入りしているのか、ここまでに記してきたクラブ側の意図を保護者に理解してもらう丁寧な説明がまずは必要だ [※ I] [※ J]。

学業優先の方針をクラブ側が貫けば、副産物が生まれてきてもおかしくない。コーチングスタッフのひとりとは、こう期待する。

「大好きなサッカーをやりたい一心で、頭を使うようになるかもしれません。学校の授業にもっと集中するようになったり、グラウンドに早めに到着して、練習前にボールを蹴るようになったり。いろんな子が出てくるかもしれません」

他の模範となるアカデミー生が現れたら、周囲に好影響の輪を広げてくれるかもしれない。学生の本分は学業であり、サッカーのための限られた時間という制約をいかに逆手に取るかも、たしかに文武不岐を軌道に乗せていく上で軽視はできないだろう。

表現を換えて、繰り返しておこう。サッカー以外でしか、学べないことがある。学業の多くが、これに該当する。しかし、その逆のような考え方もある。前述した通り、Jリーグのクラブで育成に携わった過去を持つ田村雄三は、その頃の経験を通してそれを実感してきたと言う。つまり、サッカーを介してこそよく学べる、サッカー以外のこともあるのだ。

「例えば、試合や練習を通して育めるのは、チームスポーツならではのメンタリティです。チームメイトを思いやる気持ちか

<参考語録>

「プロサッカー選手を目指してきたアカデミーの選手は、二度“地獄”を見るものです。別の言い方をすると、大きなストレスに二度襲われる。最初はプロになる夢を諦めなければならない時のストレスで、同時に高校卒業後の進路をどうすればいいのかという二度目のストレスに見舞われる。普通の高校生とはそこが違います。なおさら文武不岐が必要になってくるわけです」(いわきFC監督・田村雄三)

<展望&課題>

学校訪問への強化部の関与

これまでアカデミーの担当コーチだけで分担してきた学校訪問にクラブの強化部も参加するようになれば、課題となっている中学校との連携が一気に進むのではないかとというアイデアがクラブ内で提案されている。人員が限られていたアカデミーのスタッフに強化部のスタッフが加われば、教師との面談の日程調整が容易になり、アカデミー生全員により目が行き届くようになっていく。そう見込んでのアイデアだ。

カズコーチ語録②

「勝敗よりもはるかに重要なのが他の人からどう見られたいかというビジョンです。指導者はそのビジョンを落とし込んだ重要な価値観について、例えば規律正しさ、尊敬の念、愛情、信頼の重要性などを子供たちに説いていくわけです。こうした価値観は簡単に壊せるものではありません」
「本物のコーチであるためには言うこと、考えていること、言行が全て価値観に沿ったものでなくてはなりません」

※ 6

いわきFCの取り組み

学業との両立②

学業成績の把握

U18年代（ユースカテゴリー）の高校生については、年4～5回の定期テスト（中間テストと期末テスト）の教科ごとの成績（各100点満点）を、学年順位とクラス順位の変動入りで把握している。その成績から次回定期テストの合格基準点を設定し、1教科でも基準点に達しなかったアカデミー生は一部のトレーニング参加を許されず、いわきFCパーク（クラブハウス）内での自習に臨まなければならない。5段階評価の評定は、教科ごとの評定と総合評定を把握できている。

U15年代（ジュニアユースカテゴリー）の中学生については、定期テストの国語、数学、理科、社会、英語という5教科の成績（各100点満点）と、5段階評価の評定を把握している。将来的にはジュニアユースのアカデミー生の学業を振興するために、ユース昇格に必要な評定の数値を明示していく構想もある。

※ 7

いわきFCの取り組み

学業との両立③

合格基準点の設定

それをクリアできなければ一部トレーニングに参加できなくなる高校生の合格基準点は、各自が通う学校の担任や教科ごとの教師に個別に設定してもらっている。先生方は直近の定期テストの成績などから、次回定期テストで到達可能と判断できる合格基準点を導き出す。中学生は教師が定期テストの合格基準点を設ける代わりに、本人が目標点数を定め、クラブに申告している。ただし、成績が著しく振るわない学生に限って、アカデミーの担当コーチが目標点数を定める場合もある。さらにアカデミー在籍全選手の定期テストの平均点を開示し、平均点を下回っているアカデミー生に注意を促すケースもある。

ら、日常生活で見知らぬ隣人を手助けするようになるかもしれません。どれだけ辛くて嫌な役目でも、チームや仲間のためなら頑張れる。そうした献身性や自己犠牲の精神は、社会に出ても十分に活かせるでしょう」

そもそもなぜ、人格に磨きをかけるのか。人は独りでは生きていけない。だとすれば、人間性に優れている方が、社会の中に居場所を見出し、他者との間で心地よく生きていきやすい。視点を変えると、どれだけ知能の高い知恵者だろうと、人としての親しみや信頼性に欠ければ、他者から敬愛されるのも、尊重されるのも難しくなってくる。田村がよく例えに出すのは、目の前のゴミを普通に拾えるか〔※9〕。育成コーチ時代をこう振り返る。

「試合の勝ち負けなんかに、一切とやかく言いません。けれども、公共の場所で他人に迷惑をかけるような行動を取れば、躊躇なく叱ります。サッカークラブだろうと何だろうと、アカデミーでは人を育てるべきですから。極端な話をすると、3年や6年という年月を過ごしてアカデミーを卒業する時、目の前のゴミを普通に拾えないようなら、結局無駄な時間を過ごしてきたのではないかと。そういう判断もできるのです」

仕組みがカルチャーを作り、カルチャーが仕組みに魂を吹き込む。そう言ったのは誰だったか。人格陶冶を含めた文武不岐の仕組みが、やがていわきFCのカルチャーを作り、醸成されたカルチャーがクラブの育成システムに魂を吹き込むようになればいい。現在トップチームを率いる田村が目指しているのは、一言で言えば「気持ちのいいチーム」だ。美しい記憶として残っているのが、Jリーグのあるクラブに胸を借りた練習試合後のやり取りだと言う。先方の監督にこう褒められた。

「（いわきFCは）気持ちのいいチームだった。また（試合を一緒に）やろう！」

＜展望&課題＞

三者連携の重要性

アカデミー生がクラブで過ごせる時間は相対的に長くない。子供たちの文武不岐を実現し、人格を磨いていくためには、学校との連携を維持・強化していく一方で、家庭を含めたこの三者で手を取り合う必要がある。「サッカーが好きだから、グラウンドでは優等生っぽく振る舞っているのに、学校生活や日常生活はデタラメだという子供も実際にいるんです」とは、いわきFCのコーチングスタッフに聞いた経験談だ。高校に通うアカデミー生の中から、途中で大学受験に切り替える者も出てくるだろう。プロサッカー選手とは別の目標（トレーナーになりたい、教員免許を取りたいなど）を持つ子供も現れる。アカデミー生全員が最善の道を選択できるようにしていくためにも、三者連携には高い重要性がある。

＜展望&課題＞

保護者の理解促進を

名の通ったサッカークラブにいったん子供を預けてしまえば、もう一安心だと錯覚してしまう保護者が決して少なくない。たとえプロサッカー選手は無理でも、大学のサッカー部には進めるのではないかとといった根拠のない楽観や、低い学業成績という実態には目を背けて、できれば名門校という無茶な希望を持つ傾向も認められる。実際には、以前と比べるとスポーツ推薦による大学進学はより狭き門となっており、だからこそ文武不岐の重要性がますます増している。保護者との面談の機会を早めに設け、丁寧かつ明確な説明でこうした現実への理解を促進しておくべきだろう。場合によっては“モンスター”にもなりかねない、保護者の思い込みやエゴを軽視するべきではない。

※ 8

いわきFCの取り組み

学業との両立④

不合格ならサッカーを取り上げる

高校生は定期テストの合格基準点に1教科でも達しなかった場合、毎週木曜日のトレーニング中と週末に、いわきFCパーク（クラブハウス）内での自習に臨ませる。週末は土曜日に試合がある場合は日曜日のオフ中に、日曜日が試合なら土曜日のトレーニング前に勉強の時間を確保する。週に2日のこうした学習は、次の定期テストまで継続させる。

この取り組みの大きな狙いは、子供たちを定期的に机に向かわせて、学習を習慣化させるところにある。いわきFCパーク内の一室に子供たちを集めるのは、勉強を進めていかなければ学業だけでなくサッカーでも取り残されるといった良い意味での競争心を煽り、ポジティブな空気感を自然に醸し出していくためだ。アカデミーの担当コーチによると、効果を少しずつあげている手応えがあるという。

※ 9

目の前のゴミを拾えるか

指導者による観察が、そして発する言葉が、子供たちの人生にどれだけ大きな影響を及ぼすか。身をもって体験したのが、いわきスポーツクラブ代表取締役の大倉智だ。高校3年生の大倉が練習開始前のグラウンドで落ち葉やゴミを拾いながら歩いていたのは、怪我で戦列を離れていたからだ。練習後の全体ミーティングで大倉は思いがけない言葉を耳にする。所属していた暁星高校サッカー部監督の林義規がこう言ったのだ。「今日は良いものを見させてもらった。目の前のゴミを拾えるか。すごく大事なことだ。みんな、そういう人間にならなきゃいけない」。監督はどこから見ていたのか。いずれにしても驚きだった。全体ミーティングでのあのシーンは、30年以上が過ぎた今も鮮明に大倉の脳裏に焼き付いている。忘れがたい恩師の言葉は時空を超えて、いわきFCで息づいている。

先方の監督が着目していたのは、ファウルで倒してしまった相手の選手に「すみません」と手を差し伸べられるかどうか。スポーツを通して育まれたスポーツマンシップは、やがて優良なシチズンシップとなって、社会の様々なやり取りを円滑にしていくはずだ。田村はこう願っている。

「いわきFCはちゃんとしている。気持ちのいいクラブだ。ずっとそう言われたいですね」

問われるのは子供たちに向き合う覚悟。

スマートアスリートという明確なビジョンを掲げている以上、いわきFCの指導者にはより多角的な育成のアプローチが求められる。子供たちがどうすれば知恵を絞れるようになるか、どうすれば人格を磨いていけるか。アカデミーの指導にも携わる、田村は確信しているようだ。このクラブの指導者に不可欠なのは、子供たちにしっかり向き合う覚悟なのだと [※K] [※L]。「本気で子供たちに接しようとするほど、いろんな問題が起こります。もしくは表面化してきます。アカデミーが一見平和で、波風が立たないようにしておくには、子供たちに深く関わらないのが一番いいんです。悪さをしていても、見て見ぬ振りをする。素行の面倒は学校で見てください、僕らはサッカーだけを教えますと言わんばかりに。問題を直視しなければ、何も起こりません。上っ面を見ているだけですから、当然です。そうではなく、子供たちに本気でぶつかれば、人としてきちんと育てる責任を取ろうとすれば、問題は表面化してきます。そこでしっかり向き合えるかどうかです」

わかりやすい例を挙げると？

「まずは、きちんと挨拶できているか。社会に出たら、そこからチェックされるんだぞと、何度でもしつこく諭さなければなりません」

K

<展望&課題>

言行一致の良き模範に

「これは昔の話ですが、目の前の子供たちを本当に思って言葉を掛けているのか、疑わしいと判断せざるを得ない育成指導者にも出会いました。良いことは言っています。でも、本気で向き合おうとはしていないので、薄っぺらいと感じました」(いわきFC監督・田村雄三)。綺麗事を言うだけで、言いつばなし。行動の伴わない指導者が、子供たちの良き模範となっていけるだろうか。

L

<展望&課題>

子供たちが鏡

アカデミーの指導者こそ、自己点検を何度でも繰り返さなければいけないのかもしれない。あの言動は本当に子供たちのためだったか。自分がクラブからどう評価されているかを気にしすぎていなかったか。指導の良し悪しを確かめるシンプルなひとつの基準は、子供たちの感想や表情だろう。「僕が育成指導者のまだ駆け出しだった頃、こう教わりました。今日の練習どうだった？ 楽しかった？ と子供たちに聞いてみる。そういう質問をする以前に楽しくなさそうな表情を浮かべていたら、どんなにグッドオーガナイズできていたとしても無意味なのだと」(いわきFC監督・田村雄三)。育成指導者の鏡はおそらく子供たちなのだ。

カズコーチ語録③

「いったんコーチの職に就けば、若者たちからはいつでもコーチとして見られます。ショッピングモールで買い物をしている時だって、コーチとして見られているのです。だからこう伝えたい。コーチはいつもコーチたれと」

※10

Key Word

デュアルキャリア

セカンドキャリアが例えばプロサッカー選手の現役引退後の「第2の人生」に相当するのに対し、デュアルキャリアはいずれ自分の職業としていきたいキャリアのための準備と本格的なスポーツ活動を平行して両立させる取り組み。例えばアメリカの大学の学生アスリートが、ハイレベルの競技生活と社会に出てからの希望のキャリアに直結する高水準の学問を平行して両立させるようなものだ。いわきスポーツクラブはアカデミーの子供たちがまずはデュアルキャリアを形成していける環境を整えながら、子供たちのサッカー界における移籍やサッカーからの競技転向が可能で、レクリエーションスポーツとも自由に行き来できる仕組み作りを視野に入れている（10頁の図Gを参照）。このマルチキャリアパスウェイモデルのための環境を整備できれば、子供たちはマルチという言葉が示す通り、複数のキャリアを平行して築いていけるようになる。なお、「パスウェイ」は「道筋」を意味する。

では、公共の場所で他人の迷惑を考えないような行動を取る子供には？

「なぜ、そんな行動を取ってしまうのか、正面から向き合います。どうすれば、社会性を身につけられるのか。もしかすると、集団で何かを成し遂げられるようなサッカー以外のプログラムをクラブで用意する。そして夏や冬の長期休暇（後述）を活用するなどして、実際に体験させた方がいいのかもしれませんが。そんなのは面倒だという反応もあるでしょうが、人材を育成する指導者はそこまで踏み込む必要があるはずです」

学校の試験で赤点を取ってきた子供には？

「勉強する習慣を作れるまで、ひたすら向き合います。このクラブのアカデミーの指導者は、もしかするとサッカーの指導は二の次でいいくらい、子供たちそのものに一生懸命じゃなければいけないかもしれません [※M]」

田村がそこまで振り切って考えようとする大きな理由は、いわきFCというクラブ自体の差別化だ。子供たちにサッカーを上達させるためだけなら、その良いノウハウを持ったクラブやスクールが日本にも少なからずあるかもしれない。しかし、人格陶冶を含めた文武不岐を本格的に推し進め、アカデミーの段階からデュアルキャリア [※10] の下地を作れるクラブ、社会に大きく貢献できる多種多様の人材を育成している既存のクラブがあるだろうか。

「従来のサッカークラブの考え方はこうでしょう。サッカーはこちらにお任せください。だけど、勉強は学校に任せます。しつけ教育も他所^{よそ}でお願いします。そうしたアプローチを大きく変えようと試みているのが、いわきFCというクラブであるわけです」

伸ばしていくのはサッカーだけでなく、学業であり、人間性にも目を光らせる。こうした多面的な育成の相乗効果——学業

名将・岩出雅之の指導理念

「トップダウン型ではなく、選手たちが自ら考えて成長する組織をつくる」。そう語るのは帝京大学ラグビーを大学選手権9連覇に導いた岩出雅之。名将の指導理念を紹介したい。

- 強制しても人は動かない。動いても一時的なもの。選手が自分で気付き、納得するアプローチの方が結局早い。
- 育てるとか導くではなく、選手本人が行きたい方向にうまく向かわせてあげるというイメージ。
- 選手が率先してやろうとするカルチャー、自分たちで考えるカルチャーを築いていくことが重要。
- 監督が無理やり選手を成長させようとすると、結局は指示待ちになる。1人ひとりが自分の経験から学習し、成長できるようにしていけば、自律的に成長する組織になる。
- 選手がリーダーシップの前にオーナーシップ（自発性）を持ち、自分をコントロールしてやる気になるのが出発点。
- 選手はラグビーで勝ちたいと思っているが、ラグビーだけでは一生の保証にならない。人間的な成長はずっと求められる。社会に出た後考えたダブルゴールを目指すべき。
- ラグビーでの勝利よりも大切なのは、社会に出て活躍し、自分や周りの人を幸せにできるような人材になること。
- 一番大切なのはインテグリティ。高潔や誠実を理解して、人としてきちんとした芯の部分を持ち合わせ、いい経験を重ねて自分のもの（財産）としていく。
- 人間は楽しむことで無限の力を発揮する。楽しんだという経験で終わるのではなく、楽しむことを能力に変えていけるような考え方を育てるように指導する。

岩出雅之 いわでまさゆき

帝京大学ラグビー部監督

1958年生まれ。日本体育大学ラグビー部で活躍し、78年度の全国大学選手権で優勝。中学校教員などを経て八幡工業高校の教員となり、ラグビー部を7年連続で全国高校選手権に導く。高校日本代表監督を経て、96年から帝京大ラグビー部監督。2009年度に全国大学選手権で初優勝してから9連覇を達成。帝京大学医療技術学部スポーツ医療学科教授。ジャパンコーチズアソシエーション理事も務める。

の充実がサッカーに好影響を及ぼし、ピッチ上の取り組みが人間性を磨く機会にもなるといった——を見込んでいるところにも、いわきFCの人材育成の独自性があると言えるだろう[※N]。田村の話は次のように続く。

「経験上こう言えます。サッカー以外をきちんとしておいた方が、結果として優れたプロ選手が出てきやすい。吸収や成長が早いですし、息も長くなるんです」

ここまで見据えているなら、もはやブランディングと表現すべきだ。いわきFCに任せておけば、どんな子供でも成長できる。そんな評判が広まり、入団を希望する志願者が増え、是非入団させたいと願う保護者も増える。アカデミーからの卒業後は是非うちにと企業などから引く手あまたとなる。そんな未来がやがて訪れた暁には、第1章に記した地域からのロイヤリティ(愛着、忠誠心)の揺るぎない対象となっているはずだ。

「アカデミーの指導者たちは、もともと矛盾した世界を生きているものです」

勝利をとことん追求しながら子供を伸ばしていくのがスポーツを通じた人材育成であるはずなのに、人材の育成を優先しようすると勝敗を度外視せざるを得ない場面にどうしても出くわすからだ。しかも、いわきFCのアカデミーでは文武不岐にも人格陶冶にもしっかりと意識を向けなければならない。

逆に言えば、アカデミーのセールスポイントが、既存のサッカークラブとは大きく異なる。その分、指導者の働きを見極める評価軸も大きく異なっている。それゆえ、田村はこう呼び掛けるのだ。

「安心して、子供たちに向き合ってほしいです。しっかり向き合うのが、このクラブの指導者に求められる姿勢だと思います」[※O]

<展望&課題>

M

優れた育成指導者の温かみ

「こんなふうにも言えるのではないのでしょうか。子供たちを愛せる。そもそも子供が好き。自分を犠牲にできる。それゆえ向き合える。優れた育成指導者には、どこか温かみがありますよね。どんな手を使ってでも勝ちたいとか、自分の功績にしたいとか、よこしまな印象がありません」(株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役・大倉智)

<展望&課題>

N

勝利の確率を高めるためにも

人格陶冶の働きかけを「正直面倒に感じることもありました。例えば、あの子をまた叱らなければいけないのかというように。それでも、ちゃんと近寄って、一歩も二歩も踏み込みます。耳障りなはずの小言も言います。なぜなら、そこでその行動を正しておかないと、次の試合に勝てる確率が下がってしまうという思いもあるからです」(いわきFC監督・田村雄三)。一生懸命頑張る。最後まで諦めない。そうした人間性も、おそらく勝負の行方を左右する。

<展望&課題>

O

指導者の意識改革

「僕自身サッカー指導者ですから、サッカーは二の次だと言われて、戸惑うコーチの気持ちは分かります。ただ、このクラブはスマートアスリートの育成を掲げているわけです。その意味合いを関係者全員でしっかり共有しておく必要があるでしょう」(いわきFC監督・田村雄三)。いわきFCの指導者に求められるのは意識改革なのかもしれない。



第 3 章

いわきFCが見据える
育成の個別化とスポーツ万能化

土台はスポーツ万能。基礎理論が重要だ。

誤解を避けるためにあえて強調しておく、いわきFCはサッカークラブであり、アカデミーの子供たちをフットボーラーやアスリートとしていかに伸ばしていくか、創意工夫を凝らし、試行錯誤を厭わない。視点を変えると、フットボーラーやアスリートの育成にも最善を尽くそうとしているからこそ、既存のサッカークラブとはまったく異なるアプローチへと舵を切ったのだ。最初にあったのは、既存の考え方で本当にいいのかという疑問だった。

「サッカーは足を使う特殊なスポーツなので、特殊なスキルが必要だ」

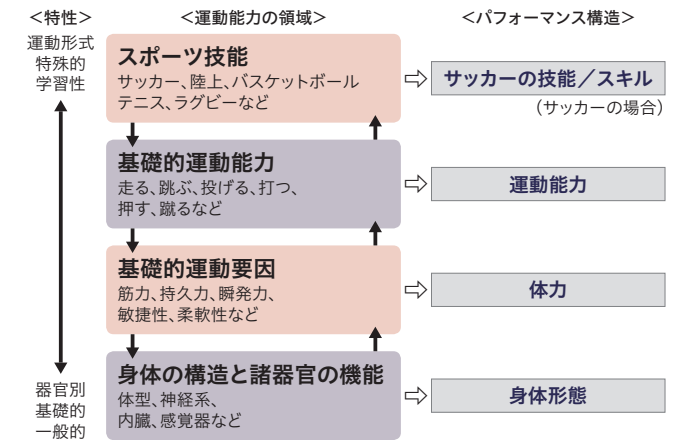
ここまで大きな異論はないだろう。それでは、続けてこんな言説を聞かされたとしたら？

「子供たちはできるだけ早くから、サッカーだけに打ち込むべきだ。なぜならば、特殊性の高いスポーツなのだから」

本当なのかという疑問が拭えなくなったのは、育成診断テストの結果、いわきFCアカデミー第1期生たちの体力・運動能力〔図A〕〔※B〕に看過できない偏りや歪みが生じていると判明したのが大きなきっかけだ。各種スポーツ技能（右上の図Aを参照）の基礎となる体力・運動能力に問題を残したままだと成長の妨げになり得るだけでなく、怪我のリスクを上げてしまう。そうした事態を避けるべく、アカデミーの第1期生は土台の作り直しを強いられ、最長2年前後という時間をそのプロセスに要している。

この対応策を含めて、いわきFCが目指しているのはアカデミー生全員の“スポーツ万能化”だ。「できるだけ早くからサッカーだけに打ち込むべき」とは真逆の仮説を立てた上で、サッカー自体の時間をあえて減らす。それでできた時間を活用して、

運動能力の領域



参考資料：文部科学省「運動能力の領域と各種テストとの対応関係」

上図は文部科学省が分類した「運動能力の領域」を、サッカーの「パフォーマンス構造」に置き換えたものだ。身体形態は体力に影響を及ぼし、体力は運動能力に影響を及ぼす。さらに運動能力はサッカーの技能に影響を及ぼす。

<展望&課題>

様々な「体力」「フィジカル」

注意を要するのが「体力」という言葉の使い方だ。定義にばらつきがあるので、「体力が足りない」というコーチの指摘が例えば持久力を指しているのか筋力を指しているのか、受け手の解釈が割れるケースも少なくない。上の図Aでは、瞬発力や敏捷性、柔軟性も「体力」に含めている。「体力」という言葉を使う代わりに、語義のより明瞭な言葉を使った方が意図を正確に伝えられるだろう。同様の問題を指摘できる言葉に「フィジカル」がある。

※ 1

Key Word

運動スキル

運動とは日常生活や労働など、人間が身体を動かすこと全般をいい、特定のスポーツ活動やエクササイズを指しているわけではない。「運動スキル」を広義で捉えると「運動能力」と同義となる。走る、投げる、跳ぶ、打つなどといった個別基礎運動を、走りながら投げる、走りながら投げ、狙った的に当たるというように運動の質を向上させて、運動をスキル（技能）化していく。さらに一定の運動スキルを備えた上で、身体的、心理的、社会的特性（この3つを合わせて「心技体」と言う）が高まると、「身体リテラシーが高まった」などとも表現する。

※ 2

Key Word

姿勢制御センサー

地球上に生息する生物にとって、重力は目に見えない負荷や抵抗となっている。人間の運動やスポーツ活動は一般的に多くの場合、重力に対抗するか、重力を活用して行われる。重力を操りながら運動する際に、最も重要な機能となるのが姿勢の制御だ。とくに二足歩行の人間は、四足歩行の動物と比べて姿勢が不安定になりやすい。スポーツで走る、回転する、方向転換するといった動きの際にも姿勢は不安定になりやすく、姿勢が崩れるか、姿勢を維持できずにいると、上手く運動できなくなる。人間の姿勢制御機能が発達したのはそれゆえで、主に視覚と耳の奥にある前庭覚、骨格筋内の深部覚が重量、体勢、加速、位置、荷重などの情報を統合的に収集するセンサーの機能を担っている。これらのセンサーから得た情報を脳が処理し、身体各部へ指令を送り、運動を行っている。

“昔の学校体育”をやり直す。かつては暮らしの中で自然と身につけていた、跳ぶ、回る、投げるなどの運動動作をだ。

幼時から神経ネットワークを発達させ、あるいは成長の過程でそれらを作り直し、スポーツ万能になると、こういったメリットが得られるのだろうか。育成システムを長年研究してきたその道の第一人者で、2017年夏からいわきFCアカデミーのアドバイザーを務める小俣よしのぶによると、あらゆるスポーツ技能の即座の習得が可能になると言う。

「未経験の運動の実演をパッと見て、自分で数回試してみただけで、なんとなくこなせるようになるのがスポーツ万能です」

なぜ、即座の習得が可能になるかと言えば、スポーツ万能に成長していく過程で体内にきわめて多くの“感覚”を養っているからだ。

「野球のボールを投げるという動作ができれば、その感覚をテニスのスマッシュやバレーボールのオーバーハンドサーブなどにすぐ転用できます。陸上競技のスプリントを経験していると、その感覚がサッカーの局面に応じたランニングに容易に応用できる。すなわち即座の習得です」

あらゆるスポーツの指導者が認識しておくべきなのは「技術（テクニク）」と「技能（スキル）」の違いだ。小俣の解説にさらに耳を傾ける。

「運動学では、技術は身体の“外にあるもの”と表現されています。技術が身体の中に入り、その人なりの勘やコツが備われば技能に変換されます。例を挙げるとサッカーの指導書に、こう蹴りましようとして解説されている。あれは技術です。誰のものでもない。別の例でコーチが蹴り方の見本を見せ、選手が真似ようとしています。真似をしながら、その選手自身の身体体力条件に合わせて作り直して、同じような蹴り方ができるようになれば、それは技能です。その選手なりの勘やコツがプラスされ

<Point of View 大切な視点>

フィジカルと戦術は切り離せない

目の前の選手1人ひとりを伸ばしていくために、育成指導者には多角的な視点と総合的な判断が求められる。例えば、フィジカルと戦術は切っても切り離せない。足が速くなったとすれば、その速さを「いつ」「何のために」使うのか。この「いつ」「何のために」が戦術だ。戦術を機能させるためには技術が必要で、パフォーマンスにはメンタルも影響してくる。多角的な視点で全てをリンクさせながら、総合的に向上させていく必要がある。こうした考え方が育成指導の大前提だ。

子供たちはまず、止めて蹴る技術などの普遍的なベースをしっかりと築く。試合で遅しさ、粘り強さ、闘争心などを発揮するためにも、サッカーの原理原則は知っておく必要があり、フィジカルの土台も欠かせない。普遍的なベースができていれば、どのチームに行っても、どの監督の下でも順応できる。

個性を伸ばすためにもベースが不可欠

普遍的なベースをしっかりと作っておくのは、それぞれの個性を伸ばし、最大化していくためでもある。普遍的なベースを作りながら、それでいて個性を損なわず、いかに伸ばしていくか。アプローチの仕方は、選手1人ひとりに合わせていかなければならない。戦術には二通りある。そのチームに固有の戦術と一般的な戦術だ。一般的な戦術は普遍的なので応用が利く。固有の戦術は応用が利きにくい。ただし、個の特殊な能力を伸ばすために、その能力を最大限に活かせるチーム戦術を採用した方がいいケースもある。いわきFCのアカデミーはサッカーの時間が限られる。フィジカルだけに、あるいは戦術だけに偏らないようバランスを取りながら、指導の優先順位を探り、取捨選択していくコーチの判断がことさら重要になってくる。

※ 3

Key Word

コーディネーション

コーディネーションとは手や足、胴体など身体の動作を運動課題に応じて組み替える能力。それを養成するコーディネーショントレーニングとその理論は、1960年代の東ドイツで構築された。動作の組み替えが適切であれば、巧みな動作となって現れる。熟達した選手に見られる力感のない、リズミカルで流れるような、洗練されたフォームやスキルは、発揮する力の適切な調整によるものだ。似ているのが、車を運転する際のアクセルの調整だ。アクセルの踏み込み方を微妙な力加減でコントロールできれば滑らかで上手な運転になるのと同じで、運動器による力の出し方を上手くコントロールできると巧みな動きとなる。

※ 4

Key Word

有能感

スポーツ万能にはメンタル面に及ぼすメリットもある。どんな運動でもこなせるので自信がつき、自信があるから様々なチャレンジができるというポジティブな循環が生まれる。子供の頃に有能感を養成するためには、運動が最適だと言われている。

ています」[※1]

ひとつの核心に迫ってきた。解説を続けてもらう。

「技能は教えられません。個別のものですから、教えようがないのです。選手はコーチのスキル（＝技能）を見て、学んではいますが、実はコーチ流の蹴り方をなんとなくコピーしているだけで、結局その選手流の蹴り方になっているのです」

技能（＝スキル）の習得は、それが高度になればなるほど、感覚が物を言う。体内に備えた感覚がきわめて多いスポーツ万能が有利になるのは当然なのだ。育成年代の選手にしっかり向き合うためには、こうした基礎的な理論を早めに踏まえておく必要もある [※C]。運動に必要な情報を収集するセンサーの働き [※2] や、巧みな動きに必要なコーディネーション能力 [※3] については、別項を確認していただきたい。

4 歳から12歳の児童を対象とする、いわきスポーツアスレチックアカデミー（ISAA）（10頁を参照）をサッカー教室としなかった理由も、スポーツ万能の可能性 [※4] に価値を見出しているからであり、時代背景を鑑みての判断でもある。昔は小学校の体育の授業や放課後の鬼ごっこや虫取りといった遊びを通して、自然とスポーツ万能に近づいていた。時代は大きく変化し、そもそも学校体育がおかしくなっている [※5]。放課後の子供たちも塾通いなどで多忙になり、3つの「間」を失いがちだ。自由に遊べる「時間」が足りず、一緒に遊べる「仲間」が少なく、空き地や野山など遊べる「空間」も減っている [※D]。

スクール生たちのスポーツ万能化を目指すISAAは、同時に現代の子供たちに起こっている体力・運動能力の低下、感覚統



＜展望&課題＞

C

育成基礎理論の指導者間の共有

ドイツではあらゆる競技スポーツの指導者が「一般トレーニング学」(P17の図Fを参照)を学び、選手育成の基礎理論を共有している。もともとはオリンピックスポーツの競技力を高めるために作られた理論で、その教科書を読み込めばスポーツ科学全般に通読できるという。異なるスポーツや競技の指導者が同じベースを共有できているので、体力を含めた用語の定義や解釈にブレがなく、情報交換も容易になる。日本ではまず統一された一般理論が必要だ。

＜展望&課題＞

D

日本版スキルズ・ガーデン構想

子供たちが遊びの場とできる“昔の野山”を、いわきFCパークの敷地内に再現してみてもどうか。スポーツ万能化に繋がるこのアイデアが、今後クラブ内で検討されるかもしれない。基礎的運動能力という土台を重視し、いわきFCと同様の取り組みを進めてきたオランダの名門アヤックス・アムステルダムは、様々な運動が可能なフィールドアスレチックのようなグラウンドを作っている。「アスレチック・スキルズ・ガーデン（運動技能の庭）」と名付けられたそうした施設がいわきにも出現するか。

いわゆるスポーツ万能の素地を自ら体得しながら、身体を動かす楽しさを体感できるISAAの子供たち。笑顔で溢れた空間だ

※ 5

時代背景

小学校体育の問題

昔の小学校体育は子供にマット運動や逆上がりなど様々な運動の機会を与え、スポーツ万能の養成を支えていた。そうした役割を体育の授業が果たせなくなってきた理由のひとつが結果重視だ。できた、できないという結果にフォーカスしすぎて、逆上がり補助器を使い簡単に回れるようにするといった、算数の学習に電卓を使うような本末転倒が起きている。子供が試行錯誤しながら自分なりの勘やコツを得ていくプロセスは省かれがちだ。その一方で運動能力や技能体得の方法は十人十色であるのに、カリキュラム通り生徒全員に決まった型を押しつけ、結果としてできない子供を増やしもしている。さらには体育にサッカーやバスケットボールを導入するなど授業のレクリエーションスポーツ化が進み、小学校でより基本的な運動動作を習得できる機会が減っている。

※ 6

Key Word

感覚統合障害

運動の前提となるセンサーからの情報が統合されずに混乱を来し、サッカーであれば静止しているボールをキックできないような子供が増えている。人間の赤ん坊は寝返りを打ちながら感覚統合を進めており、生まれてすぐに立たせようとするれば、ごろごろしているうちに身体が鍛えられている大事なプロセスが省かれる。昔の子育てではありえなかったこうした原因により、感覚統合障害が増えていると言われる。

合障害[※ 6] や若年層口コモティブシンドローム[※ 7] の増加といった社会問題の解決にも繋がってくる取り組みなのだ。

サッカー教室ではなく運動スポーツ体験クラスとなったISAAに通う子供たちは、人工芝のいわきFCフィールドで駆け回り、飛び跳ね、ボールで遊んだり、相撲を取ったり、様々な運動で身体を動かす。スポーツ万能に繋がる基礎的運動能力は24頁の図Aに記された、走る、跳ぶ、投げる、打つ、押す、蹴るなど多岐に渡り、右の図Eのようにも整理できる。ISAAのプログラムは、このほぼ全ての動作を含んだものとなっている。

ISAAの指導員は、お手本を見せるだけで教えない。実際、放っておけば、子供たちは全ての動作をできるようになるという。幼児がいつの間にか言葉を覚え、喋り出すのと同様に、ヒトのDNAにはこうした動作学習を可能とする共通の因子があらかじめインストールされているからだろう。いずれかの動作を苦手としている子がいるなら、おそらく指導の方法に問題がある。なぜなら、基礎的運動能力の身につけ方も、前述したスポーツ技能と同じで十人十色なのだから。

いわきFCアカデミーの第1期生が実証しつつある通り、基礎的運動能力というこの土台も作り直しが利くという。従来型の育成が参照してきたスキヤモンの発育曲線[※ 8] やゴールデンエイジ理論[※ 9] といった考え方はもはや疑わしいと見なせるだろう。スポーツ万能に繋がる神経系の発達にも臨界点があるとはいえ、ここにも個人差はあり、高校生で土台の作り直しが可能なケースもあるという。

育成は個別が本質。コーチは助言者だ。

サッカーは個人競技——。嘘ではない。育成に話を限れば、1人ひとりを個別に伸ばしていくべき個人のスポーツとも捉えられる。こうした育成の個別化に、いわきFCはもう着手して

36の基本動作

E

平衡系動作 バランスを取る								
回 る	起 き る	立 つ	組 む	渡 る	逆 立 ち す る	ぶ ら 下 が る	乗 る	浮 く
移動系動作 身体を移動								
は う	歩 く	登 る	跳 ね る	跳 ぶ	走 る	く ぐ る	泳 ぐ	滑 る
操作系動作 物を使う・扱う								
つかむ・つまむ	持 つ	投 げ る	蹴 る	当 て る	捕 る	掘 る	振 る	運 ぶ
渡 す	支 え る	積 む	倒 す	押 す	押 さ え る	引 く	打 つ	こ ぐ

参考資料：「運動神経がよくなる本」中村和彦著（マキノ出版）

※ 7

Key Word

ロコモティブシンドローム

立ったり、歩いたりといった日常生活を送る上で欠かせない基本的な体力運動機能が低下し、要介護、あるいはそれに近い状態にある運動器症候群。近年は子供の罹患者が増えており、足腰を使った活動量の減少が一因とされている。こうした症状が、競技スポーツに専念する子供たちの間に見られるという報告もある。その理由としては、特定の競技に特化して専念する子供たちの低年齢化が挙げられている。

※ 8

Key Word

スキヤモンの発育曲線

人間の神経系の量は幼少期に急激に増加し、5歳で成人の80%、12歳でほぼ100%に達すると唱える説。この説を誤って理解すると、12歳を過ぎてから様々な運動をしても、もはや手遅れという話になる。曲線のグラフで知られている。

※ 9

Key Word

ゴールデンエイジ理論

運動学習最適期に関する理論。ゴールデンエイジとは専門的技術習得に適した年代を指しており、9～12歳をそう呼んでいる。プレゴールデンエイジ期（3～8歳頃）に様々な動作を身につけておけば、ゴールデンエイジ期にスキルの即座の習得が可能になると言われる。スキヤモンの学説や神経生理学、スポーツ運動学などを根拠とする理論である。

いる。

育成の個別化を進めていく根拠は、前述した通り、スポーツ技能の習得に十人十色の性質があるからだ。そもそも、個々の運動能力を決定付ける4つの領域（24頁の図A）は、隣接する領域同士で影響を及ぼし合う。一番下の身体形態（身体の構造と諸器官の機能）が全員異なる以上、さらには成長の度合いにばらつきもある育成年代は、個別のトレーニングに大きなメリットがあるというわけだ。

技能の掴み方は人それぞれなので、やはり前述した通り、教えられない。ボールはこう蹴るべき、こう止めるべきなどと子供たちを鋳型に流し込む指導は避けなければならない。育成指導者は、あくまでサポート役なのだ。子供たち1人ひとりが快適な自分流を発見し、勘やコツを掴める機会を与え、積極的にチャレンジさせるべきである。コーチは子供たちの間を巡回し、必要があればアドバイスする。必要がなければ、ただ見守る。いわきFCアカデミーのアドバイザー、小俣よしのぶがイメージするのは個別指導の学習塾だ。

「塾には同じ時間に集まりますが、別々の教科書でそれぞれ勉強する。優秀な先生は生徒1人ひとりの机を回って、的確にアドバイスするだけです」

助言者だからといって、責任が軽くなるわけではない。アスリートは自分の運動を、自分の肉眼では確かめられない。的確なアドバイスをくれるコーチが、だからこそ必要なのだ。精度の伴ったキックと、ミスキックのどこに違いがあったのか。客観的に違いを見極め、ニュアンスまで上手く伝えられるか。

言語化するのが困難な、コーチが実演するしかなかったり、擬態語で表現するしかなかったり、そんなアドバイスが少なくない。その意味でも、選手は体内にきわめて多くの感覚を持ったスポーツ万能が望ましいという話もできる。微妙な違いを巧

<Point of View 大切な視点>

いわきFCのフットボーラー育成メソッド

いわきFCはアカデミー生たちをフットボーラーとして育てていくためのメソッド作りをすでに進めている。ここでは第4章以降で詳述していくその内容の一部を、先取りして紹介しておこう。いわきFCのフットボーラー育成メソッドは、子供たちの個を最大化していくために目標を設定し、その目標に近づけていくための具体的なアプローチの方法、すなわちトレーニングの内容をサッカーの理解度に合わせて変えていく。大きな目標のひとつが「魂の息吹くフットボール」を体現できる選手たちの育成だ。そこから逆算し、サッカーの理解度に合わせたシチュエーションごとのテーマを設け、別項（25頁の「大切な視点」）で触れた通り普遍的なベースを築きながら、いわきFC固有のサッカーを実現していくための選手を育てていく。

トレーニングのテーマは、サッカーの理解度に応じて高度化していく。具体例を挙げると、魂の息吹くフットボールに不可欠な「攻撃の局面でリスクを冒せる選手」という目標を見据えながら、サッカーの理解度に応じ、トレーニングのテーマは「ゴールを目指しながら一個一個つなぐ。前進する」から、「ゴールを目指しながら一個一個つなぐ。ロングボールの導入」へ、さらには「つなぐとロングボールを使い分ける」、「パターンを増やす」、「パターンを選べる。ゲーム中に解決する」へと高度化していく。

メソッドは常に刷新していくもの

メソッドは永遠に変わらないものではなく、むしろ常に更新を迫られる。社会が進化していくように、サッカーも進化していくからだ。スペインの有力クラブ、ビジャレアルはメソッドを毎年刷新しており、3年前と比べるとまったく違ったメソッドに変わっているという。

みに調整できる感覚がなければ、上達に時間がかかるか、技能の習得をもう断念するかという展開にもなりかねない。

いわきFCが進めている育成の個別化は、アカデミー生を単純に学年で分ける旧来のカテゴリーの見直しから始まった。念のため記しておく旧来の分け方では、例えば誕生日が2005年4月2日から2006年4月1日までがひとつのカテゴリーとなる。中学校や高校の学年と同じだ。

こうしたカテゴリーが支障を来す分かりやすい例が、歴然とした体格差だ。体力・運動能力に大差がなく、それでいて身長が20cm体重が20kg違えば、小さい選手は常にハンデ戦を強いられているのも同然となる。まるで歯が立たないマッチアップを繰り返しているうちに、サッカーそのものに嫌気が差すようになって不思議はない。アドバイザーの小侯には別の危惧もある。

「脱落したくない一心で無理しすぎて、怪我をするかもしれません。練習になんとかついていこうとするあまり、必要以上にご飯を食べ過ぎて、身長^{いびつ}の伸びが抑制されたり、歪な身体形態や体力が作られてしまったりする恐れもあります」

いわきFCがまずフィジカルトレーニング限定で学年別のカテゴリーを廃止しているのは、そうしたドロップアウトや落伍者を出さないためでもある。暦年齢（10頁を参照）に代わる新たなグループ分けの指標となるのが生物学年齢で、体格や体力・運動能力の近いアカデミー生同士と一緒にトレーニングさせている。選手たちをよりイーブンな条件で競り合えるグループに分けて、個々の成長を促そうとしているのだ。具体的にはこんな分け方だ。

「2時間のフィジカルトレーニングだとしましょう。最初の30分は体重で分けます。次の10分は体力テストのレベルで分けます。次の10分は身長別、その次の10分は足の速さで分けてもい

<展望&課題>

モチベーションのためにも

パフォーマンス（サッカー）のトレーニングでも学年別のカテゴリーを廃止すれば、子供たちのモチベーションに繋がるかもしれない。例えば、同級生と比べて体力・運動能力の成長・発達が遅れている反面、サッカーのスキルは相対的に高い中学2年生がいるとする。学年別を廃止したフィジカルのトレーニングで中学1年生と一緒になれば、意図をしっかりと説明しても、劣等感が拭えないかもしれない。しかし、パフォーマンスのトレーニングで中学3年生と一緒になれば、それがモチベーションに繋がり、フィジカルのトレーニングにも好影響を及ぼすかもしれない。

<展望&課題>

中2でもトップチームに

別項Fの例とは逆に、身体的な成熟度がほぼ最大に近づき、トップチームの選手と比べても体格が遜色ない中学2年生がいるとする。その場合、パフォーマンスのトレーニングはトップチームに混ぜてもいいのではないか。年齢別のカテゴリーを部分的に廃止したいいわきFCのコーチングスタッフは、すでにそこまで視野に入れている。「自分よりも上手い選手に刺激を受け、手本にできる選手を模範にすれば、その子の成長を促すのではないかと思います」。課題は学業との兼ね合いか。平日のトップチームの練習は午前が多く、原則的にナイターはない。

※10

男子のメリット

男女の垣根を取っ払ったトレーニングは、男子にもメリットをもたらし得る。例えばパス出しで通常とは異なる力加減が求められ、ポジションの工夫も必要となる。

※11

いわきFCの取り組み

夏休みと冬休みの長期休暇

2018年夏の長期休暇中には、アカデミーの子供たちがいわきFCパークに集まる、学習と運動の日を週2日ほどのペースで設けた。在籍する中高生の家庭は、両親が共働きというケースが多い。車社会の地方ゆえに子供たちが自宅から外出しなくなり、通学の行き帰りがない夏休みや冬休みにむしろ運動不足に陥りかねないという懸念が生じたためだ。成長期はとくに日々の最低限の運動量、活動量が必要であり、いわきFCパークに集まった子供たちはお昼頃まで学習した後、開放されたいわきFCフィールドで身体を動かす。推奨されるのはサッカー以外のスポーツや運動だが、遊び程度ならボールを蹴ってもよい。これまでの長期休暇は以下の通り。

①2017年12月23日～18年1月7日（16日間）

②2018年8月2日～8月24日（23日間※）

③2018年12月23日～19年1月7日（16日間）

※U13の日数。U18は22日間、U14は19日間、ガールズは17日間だった。

※12

Key Word

最終身長を推定する方法

精度がもっとも高いのは手首のレントゲン撮影で、最終身長を誤差1cm以内で推定できると言われている。

い。ハンデを減らせる分け方なら何でもいいです」（小俣）

2019年1月から始めたこの新たな取り組みでは、男子と女子の垣根も取り払う。その意図を小俣はこう説明する。

「ガールズだけだと体感できない男子のスピードやパワーを、近くで見せるところに意味があります。異次元の世界にあえて放り込み、成長を促すための刺激にしていこう狙いです」[※10]

似た者同士の競い合いばかりが続き、どんぐりの背比べとなってしまうと、逆効果となる恐れもある。男子だけのトレーニングでもあえて違ったレベル同士を競わせる時間を作り、アクセントとする必要が出てくるかもしれない。まずはフィジカルトレーニングで試行しているこの取り組みを、サッカーのパフォーマンス練習に取り入れていく構想もある[※F][※G]。

フィジカルコーチとしての理想を言えばと、育成年代のトレーニングについて小俣はこう語る。

「いわきFCには現在、90人ほどのアカデミー生が在籍しています。90人が個別に自分の課題を克服していくトレーニングを進めていけばいい。課題を30分でクリアして、早めに切り上げる子がいてもいい。90分間続ける子がいてもいい。それでこそ自発的な練習です。全員同じトレーニングにしまうと、本当に必要な練習をできない子が出てきます」

育成は長期に渡るもの。社会価値の創造へ。

アカデミーの夏季と冬季の長期休暇も、いわきFCが進めているチャレンジングな取り組みだ[※11]。子供たち1人ひとりを遺伝的な要因から予想できる最終身長[※12]に少しでも近づけるために、数週間の休養期間をあえて設ける。

この試みに踏み切った背景に、夏の間は子供の身長が伸びにくいという研究がある。暑さから身を守ろうと汗をかいて放熱する分、その代謝で余計にエネルギーを使うため、運動しすぎ

<展望&課題>

H

保護者の不安をどう払拭するか

アカデミーの長期休暇は前例をほとんど聞かない取り組みだけに、その効果を裏付けるデータが出てくるまでは、保護者をどう納得させるかがひとつの課題となりそうだ。2018年の夏休み前に実施した説明会やその動画の配布等、事前に意図をしっかりと伝える機会を今後も確保していきたい。

<展望&課題>

I

将来性をどう見極めるか

いわきFCアカデミーアドバイザーの小俣よしのぶによる将来性を見極めるための一般的な着眼点をいくつか挙げておく。

①将来性の基本は身長と身体形態。

②身体の成熟が進み、力もあるが、運動能力やパフォーマンスは平均程度が平均より低い。だとすると、もうさほど伸びない。

③推定される最終身長よりもずいぶん小さく、まだ力もあまりない。にもかかわらずその条件から出ないであろう運動能力やパフォーマンスを見せていたら、さらに伸びる可能性、トレーニングリザーブや可塑性が十分にある。つまり、将来性があると判断できる。そう判断してあげないと、早熟な子がいれば有利になりかねない。

※13

遅生まれ

誕生日が4月2日から12月31日の人で、学年は例えば2005年の遅生まれと2006年の早生まれ（誕生日が1月1日から4月1日）が同じになる。2005年の早生まれは2004年の遅生まれと同年。同学年同士なら、身体的な成長は誕生からの日数が多い遅生まれの方がおおむね早い。このような現象は相対年齢効果と呼ばれ、スポーツに限らず子供や教育に関連する場面で問題となっている。

ると身体の発育にエネルギーが回りにくくなるという。逆にエネルギーを蓄えやすい冬の間は、身長が伸びやすいという研究もあるようだ。

いずれにしても避けたいのは、夏の暑さといった環境要因の影響で見込める最終身長に届かないというポテンシャルの死蔵とも言えるべき展開だ。避けるべき環境要因にはエネルギーの過剰摂取もあり、子供の頃に体重を増やしすぎると、身長が抑制されたまま成熟が加速しやすくなるという知見もある。

なぜ、最終身長を目指すかと言うと、いわゆる将来性（タレント性）の基本が身体形態にあるからだ。体力・運動能力が同水準なら、体格は大きい方が有利になる。

実験的とも言えるこの取り組みから、その確たる裏付けとなるようなデータはまだ取れていない[※H]。もっとも、効果が遅れて出てくる可能性も否めず、試みそのものを継続して蓄積したデータを検証していく必要があるようだ。

そもそも育成自体、個別に10年は観察し続けるべきだとアドバイザーの小俣は考えている。誰をアカデミーに迎えるか決定する時点では、遺伝要因や環境要因により左右される将来性を予測するのが難しい[※I]。限られた実技テストと日程だけでは、スポーツ万能の程度を見極めるのも困難だ[※J]。アカデミー入団後も身体的な発育が体力・運動能力やサッカーのスキルにどう繋がってきているか、経過の観察が必要だ。

そもそも、アカデミー入団者をどう決めるかという選抜の方法にも検討の余地が小さくない。子供たちの相対評価に陥りやすい競争選抜方式だと、遅生まれ[※13]が有利になりやすい。平均的に早生まれよりも体格が良く、体力・運動能力も高いからだ。一発勝負の入団テストでは早生まれが不利になりがちなので、将来性が高く、スポーツ万能の子でも埋没してしまう恐れがある[※K]。

<展望&課題>**コーチの勘**

「ドイツではスポーツ万能かどうか、選手にいろいろトリッキーな動きをさせて、チェックしていく方法が作られています。ただ、その時にその動きができなくても、できるようになりそうだという選手もいます。その“できるようになりそうだ”という勘のようなものが、とくに育成指導者には必要です。今年トップチームに入団したパイロン選手はまだ無名の頃、いわきFCの練習に参加して同じようなテストを行い、独特なリズムを持っていると分かりました」（いわきFCアカデミーアドバイザー・小俣よしのぶ）

<Point of View 大切な視点>**目の前の子供をしっかりと見ているか**

「目の前のその子をしっかりと見てほしい」
アカデミーの育成にも携わるトップチームの田村雄三監督は、言葉に力を込める。
「どうすれば、その子がより育つか。いわきFCの指導者には、その視点が不可欠です」
視点は多い方がいい。育成対象の子供を様々な角度から見れば、潜んでいた個性が浮かび上がってくるかもしれない。コーチングスタッフが多様な意見をぶつけ合い、より良い、そして最善の指導を考える。方向性が決まれば、指導者間でしっかりそれを共有し、助け合う。
「スタッフ全員が関わります。あの子のここを見ておいてなどと声を掛け合いながら、みんなで協力します」
文武不岐を掲げ、アカデミーの裾野を広げようとしているいわきFCの場合、トップチームのサッカーに合わない子供も出てくるだろう。だからこそなおさら、コーチングスタッフ1人ひとりが個性を見落とさない多角的な視点を持ち、その上で力を合わせていくべきなのだ。

いっそのこと、アカデミー入団に必要な学業成績の基準を高めめに設け、その条件をクリアしたISAA出身者の中からスポーツ万能の子供を優先的に昇格させるというような発想の転換も求められるかもしれない。第1章に記した通り、いわきFCの育成のひとつの理想は「世界最高峰のトップクラブからプロ契約を誘われ、世界最高峰の大学にも合格しているようなスーパーマルチな人材の輩出」なのだから。

話を夏季と冬季の長期休暇に戻すと、ここまでの取り組みに手応えがなかったわけではない。リフレッシュの効果は、休み前と休み明けのプレーに対する意欲の違いとなって現れた。それ以上に目を引いたのが、怪我の発生件数の明らかな減少だ。夏季休暇を取らずに炎天下での試合や練習を連日続けると、暑さの分だけ余計に疲労が蓄積して秋以降のスポーツ外傷や障害が増えていたのではないか。夏季休暇を取ったクラブゆえに、そんな仮説も立てられる。いわきFCの育成指導者たちは、こう期待する。

「このデータを3年、5年と蓄積していけば、いわき発信の問題提起が可能になるかもしれません。なぜ、夏休み中に学生向けの大会や試合がこれほど多く、長期の合宿や遠征も盛んなのか。子供たちが休む間もなくサッカーに追われ、酷暑の日中に過度の運動をしているのは、世界的に見ても異常ではないのかと」

社会価値の創造といういわきFCの理念に沿った同様の取り組みに、アカデミー生の競技転向や移籍を含めた人材の移動を容易にする他のスポーツクラブや部活動などとの連携がある。長期に渡る育成では途中で別の競技への転向を望む子供や、レベルを下げてサッカーを続けながら学業により力を入れたいと望む子供も出てくるだろう。いわきが先行事例となり、子供たちのそうした希望を幅広く叶えられる新たな仕組みができれば、それもまた日本全国に発信していく大きな価値がある。

<展望&課題>

K

欺かれない眼力を

サッカークラブの育成部門への入団テストを通過するための“プレパレーション”と呼ばれる試験対策がある。プレパレーションの効果でアカデミーの門をくぐってくる子供から、どうやら落伍者が出やすいようだという話もあり、入団テストを担当するスタッフには「欺かれないだけの眼力が要る。目の前で見ていることを安易に信用しすぎない姿勢がまずなければ」（株式会社いわきスポーツクラブ代表取締役・大倉智）という要求が。

<Point of View 大切な視点>

育成に必要なのは熱量。熱い議論だ

優れた育成に指導者の情熱が不可欠なのは言うまでもない。では、熱量を最大化するためには、何が必要なのだろうか。「熱いディスカッションだと思います」語源を辿ると、ディスには「否定的」という意味合いがあるようだ。アカデミーの指導にも携わるトップチームの田村雄三監督がディス（否定によって）・カッション（語源は「叩く、揺さぶる」）という爆弾をどんどん仕掛けていくのは、スタッフ間の議論を爆発させるためなのだ。「なぜかと言えば、子供たちを育てたいから。大人の関係性なんか二の次です。監督が頭ごなしに主張を聞かせるだけで議論にならないと、損するのは子供たちです。いわきFCは人を伸ばそうとしていますから、大人もちゃんとぶつかります。最終的には恨みっこなしです」その子の大事な個性はどこにあるのか。サッカー選手としてだけでなく、人としてどう育てていくか——。「いわきFCって熱いよね。子供のことを本当に考えているよね。そう言ってもらえるクラブにしていきたいです」